

いちょなみき

No. 83

岡山大学が描く未来。

- **岡山大学病院が目指す姿**
中央西日本臨床研究コンソーシアム
革新的医療技術創出拠点プロジェクト
岡大バイオバンク
- **専門外来へようこそ**
放射線治療・陽子線治療外来
抗がん剤適応遺伝子検査外来
夢の会話プロジェクト外来
- **岡山大学における地域医療人材の育成**
教員、学生、卒業生が語る医学部「地域枠コース」
- **News & Topics**
大学の動き／研究・臨床成果
- **岡山大学病院総合患者支援センターをご存知ですか？**



医学部正門

岡山大学が描く未来。

「革新的医療技術創出拠点」として、健康長寿社会実現に貢献

岡山大学病院は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) が所管する「革新的医療技術創出拠点プロジェクト」の一翼を担い、国際水準の臨床研究・治験を実施している。

本特集では、岡山大学病院の中国・四国の基幹病院とのネットワークを活用する“中央西日本臨床研究コンソーシアム”の取り組みや、特定の疾患について専門的な診断や治療を行う専門外来、地域医療人材の育成について紹介する。



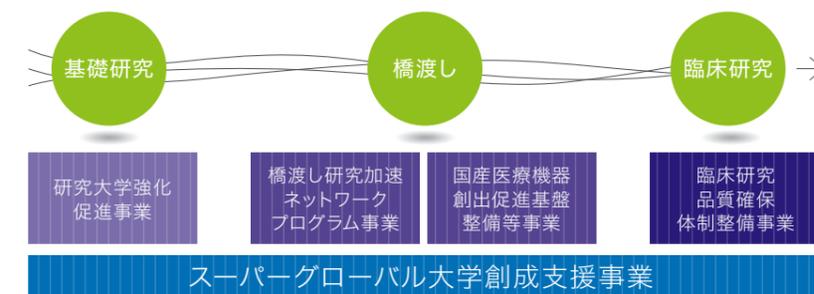
OKAYAMA
UNIVERSITY

目次

- 01 岡山大学が描く未来。
岡山大学病院が目指す姿
中央西日本臨床研究コンソーシアム
革新的医療技術創出拠点プロジェクト
岡大バイオバンク
- 05 専門外来へようこそ
放射線治療・陽子線治療外来
抗がん剤適応遺伝子検査外来
夢の会話プロジェクト外来
- 07 岡山大学における
地域医療人材の育成
教員、学生、卒業生が語る
医学部「地域枠コース」
佐藤 勝
大学院医歯薬学総合研究科 教授
「地域枠コース」に入学して——
石田 智治 医学部医学科 6年
坂東 優希 医学部医学科 3年
地域への着任を前に——
木浦 賢彦
岡山赤十字病院 臨床研修医
- 11 News & Topics
次期岡山大学長に榎野病院長
「学都基金発起人会」を発足
くも膜下出血後に生じる血管収縮
誘導するタンパク質を特定
国際原子力機関 IAEA と
新しいがん治療法に関する協定を締結
お知らせ「歯と口のトラブルナビ」
口の健康を意識するツールに
大学の動き/研究・臨床成果
- 15 岡山大学病院
総合患者支援センターをご存知ですか？

5つの核が揃った研究機関

岡山大学は文部科学省の「研究大学強化促進事業」、「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」、「スーパーグローバル大学創成支援 (Top Global University Project)」、厚生労働省の「臨床研究中核病院整備事業 (現：臨床研究品質確保体制整備事業)」、「国産医療機器創出促進基盤整備等事業」に採択されました。基礎研究で得られた成果を実用化までつなげるための“5つの核”が揃ったことで、基礎研究から臨床研究をシームレスに結ぶ高いポテンシャルを持った研究機関として機能しています。岡山大学は今後も、世界水準の研究・教育・地域医療のさらなる充実を目指します。



革新的医療技術創出拠点プロジェクト

岡山大学病院は、国際水準の臨床研究を行う中心的な拠点として、「革新的医療技術創出拠点」に選定されています。日本発の革新的な医薬品・医療機器等の創出、難治性疾患や小児疾患等の医師主導治験、臨床研究を実施するほか、健康寿命の延伸を目指した次世代医療を構築するための橋

渡し研究を推進しています。中国・四国地方における唯一の拠点として、中国・四国地方から新しい医薬品、医療機器を創出することで、より多くの研究成果を社会に還元することを目指しています。

臨床研究品質確保体制整備事業

充実の臨床研究ネットワーク

難病・希少疾患・小児疾患など、疾患別ネットワーク

中央西日本臨床研究コンソーシアム

成果達成へのプロセス構築

週単位のPDCA*マネジメントなど、意思疎通を最適化し、成果を最大化する一連のプロセス構築（成果達成の習慣化）

基礎研究シーズの実用化

有望な基礎研究シーズの実用化に向けた開発研究

臨床研究拠点

高水準の臨床研究 + 業事承認申請に向けた体制

人材育成プログラム

強みを最大化する自己開発型研修コース 成長と活躍の機会を提供

医歯薬工農連携

ユニークなシーズ開発を目指した幅広い人材交流と独自性を強めた成果

*PDCA: 計画(plan)→実行(do)→評価(check)→改善(act)という4段階の活動を繰り返し行うことで、継続的にプロセスを改善していく手法。

一歩進んだ医療の提供を目指して

岡大バイオバンク

バイオバンクとは、手術や検査で採取した血液、組織、尿など（生体試料）を、治療や検査の記録など（診療情報）とあわせて保管・管理し、医学の研究に活用する仕組みのことです。提供された生体試料と診療情報は、病気の予防・診断・治療にわたる多くの研究を支える貴重な資源となり、その研究成果は、未来のより良い医療につながることを期待されています。

岡山大学病院は2015年4月、「岡山大学病院バイオバンク（岡大バイオバンク）」を設立しました。バイオバンクの検体を利用して遺伝子解析などを行い、病気の解明や新しい治療法の確立、創薬に役立てるための活動を行っています。一歩進んだ医療の提供のためにも、岡大バイオバンクへのご理解とご協力をお願い致します。

■岡大バイオバンク HP <http://biobank.csv.okayama-u.ac.jp>



中央西日本臨床研究コンソーシアム

“メガホスピタル”化で、大規模な臨床研究や治験を迅速に実施

中国・四国地方の基幹病院とのネットワークを活用

岡山大学病院は、中国・四国地方の基幹病院とのネットワーク「中央西日本臨床研究コンソーシアム」を構築し、組織連携することにより一つの大きな病院「メガホスピタル」として活用することを目指しています。中国・四国地域を中心とした基幹病院のうち、200床以上の83病院（合計3万3千床を備えたネットワーク（58関連施設と連携正式合意（2016年11月末現在）で、①コンソーシアム参加施設の疾患情報患者データを利用できる環境の整備 ②地域医療人材育成のための教育プログラム強化 ③海外製薬企業、研究機関への積極的なアプローチを実施しています。また、コンソーシアム関連施設をはじめ、大学や企業関係者など、幅広い層に向けて臨床研究・治験の情報を発信するポータルサイトを開設したほか、インターネットを介した教育プログラム「e-Learning」によって、臨床研究・治験に携わる人材の能力開発を進め、メガホスピタルを支える病院での倫理的妥当性と科学的妥当性を担保した臨床研究の拡大・推進も促しています。

同コンソーシアムでは今後も、大規模な臨床研究や治験を迅速に実施。研究成果を産業化に繋げ、社会に還元することを目指します。



国立高度専門医療研究センター (ナショナルセンター)

- 国立研究開発法人 国立がん研究センター
- 国立研究開発法人 国立循環器病研究センター
- 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
- 国立研究開発法人 国立国際医療研究センター
- 国立研究開発法人 国立成育医療研究センター
- 国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター

トランスレーショナルリサーチ





西日本の拠点へ
がん陽子線治療センターは国内11カ所目の陽子線治療施設で、最先端の機器や技術が結集しています。複数の照射方法に対応しており、中でも国内で実施できる施設が少ない、腫瘍の形状に沿って塗りつぶすように陽子線を照射する「スキミング法」での治療も今後可能になります。岡山大学と津山中央病院との共同運用により、中国・四国地方にある多くの関連病院からも患者を受け入れやすい利点があります。

岡山大学病院副院長の金澤右放射線科教授は「専門外来と中四国初の陽子線治療施設で高度な医療を提供し、がん治療の西日本の拠点を目指したい」と話しています。



患者を治療するがん陽子線治療センター（津山中央病院内）の陽子線照射室。国内でも数少ない「スキミング法」での照射も今後可能になる。



光速の約70%まで陽子を加速させる装置（シンクロトロン）で、がんを破壊する力を持った陽子線ができる。津山中央病院内。

放射線治療・陽子線治療外来

陽子線でがんを破壊

がんを狙い撃ち
がんの新しい治療法として注目される「陽子線治療」。水素原子から陽子を抽出し、加速器で光速の約70%まで加速すると、がん細胞を破壊する力を持つ陽子線になります。陽子線治療の特徴はがんをピンポイントで攻撃できること。周囲の正常な組織への影響を少なくしながら、がんを狙い撃ちすることができます。

岡山大学病院が開設している専門外来「放射線治療・陽子線治療外来」では陽子線治療の可否の判断や、治療後の定期的な診察を行います。外来で陽子線治療が適応と判断されれば、岡山大学と津山中央病院（津山市）が共同運用する「がん陽子線治療センター」（津山中央病院内）で治療に当たります。

エキスパートが連携
治療を行う津山中央病院と離れた岡山大学病院に専門外来を設けたのには理由があります。全国にある陽子線治療施設の先行事例では、受診や相談に訪れた患者のうち、実際に治療を行ったのは3分の1程度とされています。岡山大学病院が立地する岡山市は交通の便が良いため中国・四国地方の広域からも受診しやすく、陽子線治療の適応とはならない患者の移動負担を軽減できます。また、がん治療は手術や薬物療法と組み合わせる「集学的治療」を行うケースも多く、がんに関する専門外来やセンターがある岡山大学病院では各分野のエキスパートが密接に連携し、高度ながん治療を提供することができます。

特定の疾患、症状について、専門的な診断や治療を行う専門外来。岡山大学病院でも、さまざまな専門外来が開設されています。最近新たにできた3つの専門外来を紹介します。

専門外来へ ようこそ

陽子線治療のポイント

がんの一般的な治療には手術による外科療法、抗がん剤による薬物療法、放射線を使った放射線療法があります。このうち放射線療法は「切らずに治すがん治療」といわれ、身体への負担が少なく、高齢者や手術不可能と判断された患者への適応も可能です。

X線など従来の放射線は身体に照射すると表面に近いほど放射線量が高く、身体の奥に向かうほど低くなります。深いところにあるがんを治療する場合、放射線の通り道にある正常な組織も傷つけるリスクがありました。また、腫瘍のさらに奥に突き抜ける性質もあります。

一方、陽子線の照射では、特定の深さで大きなエネルギーを放出し、そこよりも奥には進まない「ブラッグ・ピーク」という性質があります。腫瘍部分で放射線量のピークを持つように調節でき、腫瘍より深い部分は照射されにくく、X線より正常組織の線量を低減することが可能です。代表的な適応疾患は、2016年4月から保険収載された小児がんのほかに、前立腺がん、肝がん、肺がん、頭頸部がん（鼻副鼻腔がん）、などの塊状のがんとなっています。



夢の会話プロジェクト外来

人工舌で会話取り戻す

がんなどで舌の大部分を切除して会話に困難になった患者が、再び会話できるようになる「夢の会話プロジェクト」が実現しています。岡山大学の医学、歯学、工学部による医師連携で開発した人工舌を用いて、会話明瞭度の改善に向けた治療を進めています。

舌の役割を果たす人工舌は、入れ歯を作る技術を活用しています。開発のきっかけは、口腔外科医の経験を持つ大学院医歯薬学総合研究科の故・小崎健一教授が舌垂全摘手術（舌の大部分切除）を受けたことでした。患者自身が歯科医師だったため、専門知識を生かした詳細かつ正確な機能観察を実施。人工舌の誕生につながりました。人工舌の製作からリハビリまで一貫体制でサポートしています。

抗がん剤適応遺伝子検査外来

治療の選択肢を広げる

抗がん剤が効かなくなった人や適切な治療法のない希少がん患者に対して、遺伝子解析結果をもとにそれぞれに適した治療法を提案する「抗がん剤適応遺伝子検査外来」が、中国・四国・九州地区で初めて岡山大学病院に開設されました。

がんの多くは遺伝子の異常により発症しますが、その異常は個人で異なります。検査では患者のがん組織検体を用いて、専門機関で遺伝子約200種類を解析。検査結果をもとに、医師を含めた複数の専門チームで新たな治療法を検討・診断します。効果の期待できる薬の選択や治療方針の絞り込みにつながるなど、治療の選択肢を広げ、患者それぞれに適した治療が見つけられることが期待されます。



金澤右副院長。放射線治療・陽子線治療外来のある放射線科の科長も務める。
＝総合診療棟にて撮影

岡山大学における 地域医療人材の育成

教員、学生、卒業生が語る医学部「地域枠コース」

日本における都市部とへき地を中心とした一部地域との医療格差は、近年ますます広がりを見せているといわれています。岡山県の人口10万人当たりの医師数、小児科数、産婦人科数は全国平均を上回っているものの、地域や診療科による偏在が認められ、県北地域や中山間地域等で地域医療を担う人材の確保が重要な課題となっています。

2006年に国がまとめた「新医師確保総合対策」では、地域医療を担う医師の養成や医学部における地域枠（入学選抜における地元出身者のための入学枠）の拡充が提言されました。

岡山大学は2010年、岡山県地域医療再生計画に呼応する形で岡山県と協定を締結し、県による寄付講座「地域医療人材育成講座」を大学院医歯薬学総合研究科に開設。本講座は「地域で学ぶ、地域で育つ、地域を支える」を基本理念に、地域の医療機関や行政と連携しながら、実習を中心とした実践的な医学教育やキャリア形成につながる生涯教育、医学部医学科「地域枠コース」の学生に対する支援などを行っています。



医学部「地域枠コース」の概要

近年の地域や診療科による医師偏在及び医師不足を解消するため、卒業後当該自治体での医療に従事することを条件として、在学期間中に岡山県、広島県、鳥取県、兵庫県から奨学金（入学金・授業料相当額及び生活費に相当する額等）が貸与される「地域枠コース」を医学部医学科に開設。医師免許取得後、一定期間各県が指定する医療機関に勤務すれば、奨学金返還は免除される。

- 【募集人員】** 岡山県7人、広島県2人、鳥取県1人、兵庫県2人
- 【選抜方法】** 大学入試センター試験に基準点（概ね780点）を設け、調査書などの審査や大学入試センター試験及び面接の結果を総合して選抜
- 【奨学金】** 県によって年間180～240万円を在学期間中貸与

地域医療マインドを醸成し、 行政や住民とともに地域医療をつくる。

「地域枠コース」の導入によって地域医療はどのように再生していくのか。新見市の哲西町診療所でへき地診療を実践しながら、岡山大学で同コースの学生を指導している地域医療人材育成講座の佐藤勝教授に、地域医療のやりがいや学生らの変化について聞きました。



佐藤 勝：大学院医歯薬学総合研究科教授（特任）1963年生まれ。自治医科大学卒業。島根県や岡山県内の病院や診療所を経て、2010年から現職。岡山県哲西町診療所の医師も務める。

—地域枠コースの意義とは。

医師が都市部に集中する一方で過疎地などでは医師不足が生じ、地域医療の崩壊が問題になっています。国は地域医療を担う医師育成や医療格差解消へ向け、全国の医学部で地域枠を2009年度から最大11年間設けることができるようになりました。導入する大学は年々増えています。学生らが地域枠という「義務」で仕方なく地域に赴くというスタンスだけでは地域医療の再生は図れません。先端医療と同様に地域医療にやりがいや魅力を感じながら自ら進んで地域へ赴けるような教育を行い、地域枠コースに限らず、医学部・研修医ら全員に地域医療マインドを醸成することが極めて重要だと思っています。

—地域医療のやりがいや魅力、可能性を

どのように考えているか。

地域医療では家庭や職場、地域まで包み込んだ幅広い医療が求められます。現場の医師は基本的に少数ですが、国民はどこにいても同じ医療を受ける権利があり、専門分野以外の診療も避けては通れません。専門医と同レベルの対応はできません。かかりつけの病院が別であれば連絡をとって主治医に指示を仰いだり、専門医に紹介状を書くなど、できることは多々あります。医師の誠実で一生懸命な姿に住民は信頼を抱き、感謝してくれるものです。

先端医療に携わることは難しいかもしれませんが、学生らを歓迎し、医師を育てようとしてくれる温かい住民との濃密な触れ合いによって医師として最も必要な人間性や社会性が身につく。コミュニケーション能力が養えます。地域への愛着が深まり、

エビデンスだけではなく人々の思いや感情で動くようにもなり、こうした信頼関係が住民の健康管理や病気予防などの取り組み、そして地域の活性化へも発展していきます。地域医療でまちづくりに関わる面白さも感じてほしいです。

—岡山大学では1年生の時から地域医療体験実習を行っている。他大学では5年生からが一般的だが、早い段階で地域医療のやりがいを実感させるメリットとは。

学生の多くは、「目の前で困っている人の力になりたい」という純粋な思いで医師を目指しています。地域医療はまさに18歳の時に思い描いた原点そのもので、「いつでもどんなことでも相談にのる医療」を実践する現場の医師らに自らの理想とするロール

モデルを見出し、それを具現化していくことが大切だと考えています。

1年生は医療についてほとんど知らない状態で現場に行くことになり、きつと戸惑うことでしょう。ですが、医療スタッフの仕事内容や努力、地域を支える思いを感じ、訪問診療などを通じているるな住民の気持ちにも触れることができます。現場の医療スタッフや行政、住民の気持ちを知っているとこれは専門分野に進むうえでも必須要素です。実際に、実習後、学生は精悍な顔つきになり、教養などの座学にもとても意欲的になりました。体験実習の経験を発表する「地域医療シンポジウム」では地域医療の重要性や面白さ、魅力などを熱く語り、地域枠コース以外の学生が地域医療に目を向けるきっかけにもなっています。

—2017年4月、地域枠コース1期生が地域医療の現場に赴任する。どのような支援が必要になってくるか。

現場に出て初めて見えてくる問題もあるわけで、彼らの思いや不安、不満なども聞き、共に解決策を探るなど今後とも細かくサポートしていかねばならないと思っています。教育はもちろん、将来の担い手である医学部・研修医らを地域全体で熱意を持って育てること、彼らが地域に残ったり戻ってきたらと思える地域の温かい支えこそが地域医療再生の鍵だと感じています。行政や住民も医療関係者とともに地域医療を支え、地域医療をつくっていくという意識を浸透させ、働きやすい環境づくり、仲間づくりに力を入れていくつもりです。

地域医療に関するプログラムについて

地域医療人材育成講座が行うプログラムは、地域枠コースの学生だけでなく、一般の医学部の学生なども対象にしています。一人でも多くの学生に「地域医療マインド」を根付かせるため、さまざまなプログラムを行っています。

■地域医療体験実習

1年生の間に、地域の医療機関で1週間受け入れてもらう「早期地域医療体験実習」を2回実施。実習後、参加した学生自身が企画し、参加していない同級生を対象に実習の内容や気づきなどを報告する「地域医療シンポジウム」も開催。2年生以降も、1～2週間の実習がカリキュラムに組み込まれており、地域枠コースの学生は、在学中、最低5回は本実習に参加。

■多職種連携と地域包括ケアのワークショップ

歯、薬、保健、法、経、文、教育、工、農などの他学部、他大学のリハビリ、介護、福祉などさまざまな領域の学生が集まり、地域での包括的なケアを考えるワークショップに協力。学生時代から多職種連携の大切さを理解させ、地域での仲間づくりの機会を提供。

■離島体験実習

島根県と鹿児島県の離島にある病院や診療所、巡回診療に1週間程度受け入れてもらい、離島で生活しながら医療を体験する実習。2015年度は医学部3～5年生の13人が参加。

地域への着任を前に

「地域枠コース」1期生が来春、2年間の臨床研修を終え地域の病院での勤務をスタートさせます。同コースを卒業後、岡山赤十字病院（岡山市）で臨床研修を行う木浦賢彦さんに、この2年間での気づき、現在の思いなどを聞きました。



坂東 優希 医学部医学科 3年



石田 智治 医学部医学科 6年

「地域枠コース」に 入学して

なぜ「地域枠コース」を選んだのか、地域医療現場での実習を通してどのようなこと感じたかなど、同コースで学ぶ医学科6年の石田智治さんと同3年の坂東優希さんに入学後の感想を語ってもらいました。

「地域医療」に興味を持ったきっかけ。

石田：入試のとき、岡山大学医学部に入るための選択肢の一つとして地域枠コースを選びました。当初、地域医療に特に関心があったわけではないのですが、熱い思いを持って指導に当たってくれる担当教員の話や、実際に地域の病院での体験実習を重ねたりするうちに、「自分も地域医療を支える医師になりたい」という気持ちが強くなっていきました。

坂東：高校生のとき、備前市日生町に住む祖母が「病院で診てもらおうに半日もかかる」と言っていたのを聞き、「田舎にも医師がもっとたくさんいたらいいのに。自分が医師になってそういう場所で働けたら」と思ったことが、地域医療に関心を持ったきっかけです。将来、自分が大病院で働くイメージが湧かなかったこともあり、親から地域の病院に赴任する地域枠コースを薦められ、選択しました。

「地域での体験実習を行った感想は。」

石田：医師が一人で多くの患者さんを診察しており、医師一人一人のマンパワーが強いと感じました。6年間に地域の五つの病院で実習をしたのですが、どの病院の医師もバイタリティーがあり、最新設備がなくとも問診やエコーなど限られた条件の中でさまざまな患者さんの診察をしていました。何もないからこそ、医師のスキルという「個」の力が浮き彫りになっていて、「自分もこんな医師になりたい」というロールモデルにも出会ったことがありました。

坂東：これまでに三つの病院での実習を経験しましたが、どの病院の医師もとても忙しいというのが率直な感想です。医師に限らず、看護師や薬剤師など多職種の方々の

仕事に触れさせてもらえるのも貴重な経験でした。それぞれが連携を取って働いている様子をそばで見て、「自分も将来このような中で働くのか」と明確なイメージが湧いてモチベーションが上がりました。また、大学で学んでいる基礎知識が現場でどう生かされているのかも肌で感じる事ができ、「まだ知識が足りないからもっと勉強しなければ」という刺激にもなっています。

「どんな医師になりたいか。」

石田：当たり前のことを、「人でも」当たり前前にできる医師になりたいです。そして総合診療医（ジェネラリスト）を目指しつつも、何か一つでも高い専門知識を持っていたらと思っています。専門分野を見つけるのは臨床研修を始めてからになりますが、今は何をしても将来の役に立つと思うので、セミナーや離島実習などさまざまな企画に参加したり、幅広いジャンルの本を読んだりして多くのことを吸収しています。

坂東：多職種の方ともうまく連携を取って診療を行える医師になりたいです。分からないことはちゃんと分からないと言って、他の病院の専門医や看護師ら周りの方々の力を借りられるような柔軟性も持ちたいと思います。そして、学ぶことを続けながら成長していきたいです。1年生から地域で体験実習を行える「地域枠コース」に入っただけで早くから地域医療の現場を見て、そこで求められている医師像を自分なりにイメージすることができています。それを、これからの大学での勉強につなげていきたいです。



木浦 賢彦 岡山赤十字病院 臨床研修医

岡山大学の医学部「地域枠コース」に入り、1年生のときから何度も地域での体験実習を重ねたことで、地域の病院で働くときのイメージやその期待を肌で感じることができました。卒業後3年目から「地域医療を担う医師として独り立ちする」という覚悟を早くから持つことができていることが、他の学生との違いでしょうか。

地域に出るとさまざまな症状の患者さんを診る機会が多いため、臨床研修を行う病院は多くの症例が診られる総合病院を選びました。2年間の臨床研修後、引き続き後期研修を続けるケースもありますが、私は現場に出て感じた課題を後期研修で生かせるよう、まずは現場に出ることを選択しました。来春からは東北の病院で働く予定です。

臨床研修で改めて感じたことは、「医師」という責任の重さです。研修医の自分の指示一つで、ペーパードクターもその通りに動いてくれます。また、手技の重要性も痛感しました。腰に注射をして検査する髄液

検査は医師の役割になります。それがうまくできなければ髄膜炎の診断ができません。地域に出たとき、補助してくれる人が周りにいなくても、自分一人で通ることができなければならぬ。今は知識とともに手技も独り立ちできるレベルまでスキルアップすることを目指しています。

都市部の大病院は急性期医療、地域の病院は慢性期医療を中心とした役割分担がなされていますが、地域では「何でもできる医師」が求められているように感じています。専門医制度もあり、一般的な医師は自分の専門となる分野を深く掘り下げますが、地域医療に従事するには、内科をメインとしつつも、他の分野もある程度の知識を身につけておくことが必要となります。患者さんとの距離が近く、メインとなる症状以外の相談を受けることも想定されるため、少しでも地域の方の期待に応えられるよう、今はどんな欲に何でも吸収したいと思いつつ日々の研修を行っています。

TOPICS : 1

次期岡山大学長に榎野病院長



▲記者会見に臨む榎野病院長

本学は11月21日、学長選考会議を開き、森田潔学長の任期満了に伴う次期学長として、榎野博史病院担当理事・岡山大学病院院長を選出した。任期は、2017年4月1日から4年間。

学長選考会議では、候補適格者から提出された所信及び業績資料、公開ヒアリングでのヒアリング結果、意向調査結果を総合的に判断し、「リーダーシップを発揮し、責任を持って、的確に国立大学法人岡山大学を運営しうる手腕を持ち、国立大学法人岡山大学の更なる発展が期待できる」として、榎野病院院長を岡山大学長適任者として決定した。

同日、津島キャンパスで会見を行った榎野病院院長は、「しなやかに超えていく『実りの学都』へ」をキャッチフレーズに掲げ、「学部の連携を強め、教職員、学生、市民に実感される『学都の実質化』を図りたい。しなやかな大学運営を行い、地域に愛される大学を目指していく」と抱負を語った。

TOPICS : 2

「学都基金発起人会」を発足



▲県内外の財界人やOB、自治体関係者らが出席した学都基金発起人会



▲発起人会の会長に就いた小長全学同窓会会長(右)とあいさつする森田学長

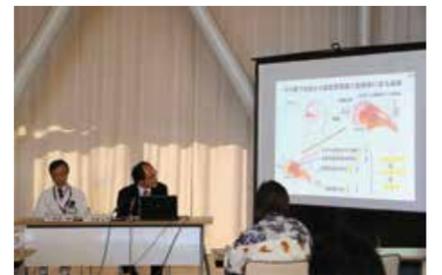
本学は10月31日、国際学術都市「学都岡山」創生のために幅広く活用する「岡山大学学都基金」の取り組みを支援する「学都基金発起人会」を発足した。発起人会には学都基金の趣旨に賛同した県内の主な経済団体や企業、本学OB、自治体、県外の著名財界人、学内関係者ら約70人が出席。同基金を県内外に幅広く周知するとともに、本格的な募金活動に向け学内外の意思結集を図った。

同基金は、2015年4月から募金を開始。教育活動、国際交流、社会・地域貢献の一層の進展とキャンパス環境の整備・充実を図り、学都創成・グローバル化の推進に資することを目的として設置された。

岡山大学学都基金 HP : <http://www.okayama-u.ac.jp/user/kouhou/kikin/>

TOPICS : 3

くも膜下出血後に生じる血管収縮誘導するタンパク質を特定



▲Jホールで記者会見を行う西堀教授(右)と伊達教授

本学大学院医歯薬学総合研究科の西堀正洋教授(薬理学)と伊達勲教授(脳神経外科)の研究グループは、くも膜下出血後に脳血管で生じる「遅発性脳血管攣縮」のメカニズムを解明。脳血管の収縮がタンパク質「HMGBl」の働きによることをラットの実験で特定した。また、「HMGBl」を動かさなくさせる抗体を、人工的にも膜下出血状態にしたラットに投与することで脳血管の収縮を劇的に改善させることを突き止めた。

くも膜下出血は、脳血管のこぶが破裂することによって激しい頭痛と意識障害を引き起こし、死に至ることもある病気。治療の約1週間後をピークとして生じる脳血管攣縮により重篤な後遺症が出ることもあり、その治療法開発が待たれている。

本研究グループはヒトの治療に使えるヒト化抗HMGBl抗体の作製にも成功しており、今後、臨床での応用に向けて治療薬の開発を進めていく予定だ。本研究成果は11月24日、英国の科学雑誌「Scientific Reports」に掲載された。

TOPICS : 4

国際原子力機関 IAEA と新しいがん治療法に関する協定を締結

法人岡山大学, 国際原子力機関IAEA ホウ素中性子捕捉療法に関する協定書調印



▲協定書に調印した IAEA のベンカテッシュ部長 (左) と森田学長、山本理事



▲学長室を表敬訪問したベンカテッシュ部長 (右)

本学と国際原子力機関 IAEA は10月26日、最新のがん治療法であるホウ素中性子捕捉療法(BNCT)について、研究・人材育成に関する連携協定を締結した。放射線治療の規制を担うIAEAに大学の研究情報を提供したり、教育プログラムを共同で作ったりして治療の世界標準化を目指す。

BNCTは、ホウ素の同位体B10をがん細胞にのみ特異的に吸収させ、中性子を照射。ホウ素の核分裂を起こして、がん細胞のみを殺傷

する放射線治療法だ。標準治療化されれば従来の放射線治療に比べて身体的、経済的負担が軽減される。

調印式には森田潔学長、山本進一理事・副学長(研究担当)、IAEA原子力科学・応用局物理化学部のメーラ・ベンカテッシュ部長が出席し、協定書に調印。森田学長が「ホウ素中性子捕捉療法協力の協定が締結されたことは、極めて名譽なること。本協定が、IAEAとのさらなる連携強化と、新たな発展につながることを期待している」と述べた。

▶お知らせ▶▶▶

「歯と口のトラブルナビ」 口の健康を意識するツールに



岡山大学病院歯科系診療科は、歯や口の中の病気を患者自身が症状から簡単に検索できるサイト「歯と口のトラブルナビ」を、病院ホームページ上に公開中です。健康維持や病気の予防のほか、早期に医療機関を受診するきっかけになることを目指し、2016年4月から公開しています。

サイトは、気になる症状がある場所(歯、歯肉、粘膜、舌など)とその症状(痛み、腫れ、色など)を選択すると、可能性がある病気の候補と解説が示される仕組み。病名を入力することなく、病院で歯科医師から問診を受けるのと同じような手順で調べられるのが特徴です。解説ページは、その病気を専門とする担当診療科のページにもつながっており、より詳しい情報を知ることが可能です。

歯や口の病気を知る「豆辞典」として、是非ご利用ください。

歯と口のトラブルナビ HP : <http://www.hsc.okayama-u.ac.jp/hos/dnavi/>

岡山大学のニュース&トピックスおよび最新情報は岡山大学のホームページからご覧いただけます。

<http://www.okayama-u.ac.jp>

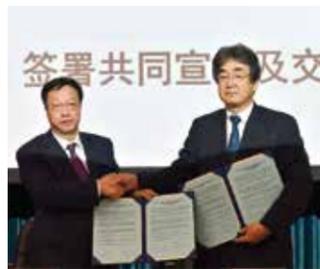
9 September

1日 全学教育・学生支援機構教育開発センターが、大学教職員等を対象にした研修会「第19回桃太郎フォーラム」を開催

2~4日 第92回日本学生選手権に水泳部の中尾駿一さんが出場し、50m自由形で22秒15のタイム(自己新記録)で優勝



5日 中国東北師範大学との友好交流30周年記念式典、国際シンポジウムを開催



9日 「岡山大学・フエダ学院特別コース」10周年記念行事をベトナムのフエダ学院で開催

12~13日 ミャンマーのミン・トゥ工保健大臣が来学し、大学病院などを視察

16日 文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」に「東アジア高等教育圏を見据えた中核的高度実践人IIアジアネットワーク育成プログラム」が採択

28~10月1日 世界ユースサミットOne Young World (OWY)に、経済学部4年のマーシャル・香村さんが、医学部3年の佐武秀紀さんが日本代表団の一員として参加



29日 カナダ・ベック先端科学技術大学院大学(NSS)と学生交流協定を締結

30日 平成28年度秋季学位記授与式を挙



10 October

1日 岡山県内の産官学等の代表が、地域の課題解決に取り組む「おかもやま円卓会議」を設立



2日 大規模・重大化する情報セキュリティインシデントや高度化するセキュリティの脅威に対応する「コンピュータセキュリティインシデント対応チーム(CSIRT)」を整備

2日 第28回日本ジュニアボテビル選手権大会で、ウエイトトレーニング部の黒川宏太さんが準優勝

4日 フランス・ストラスブール大学と教員交流に関する協定を締結



5日 フランス・ストラスブール大のミシェル・デネケン学長、ストラスブール市広域自治体のカトリック・ヌトロットマン副議長を招き、「国際学都シンポジウム」を開催

8日 平成28年度岡山大学秋季入学式、大学院秋季入学式を挙

8日 「日本留学フェア2016」日本との未来を拓け「STUDY AND JOB」をミャンマーのヤンゴンで開催



12~14日 アジア最大のバイオビジネスイベント「Bio Japan 2016 World Business Forum」を開催

22日 「スーパーグローバルホームカミングデー2016」を開催

25日 教育学部附属小学校が創立10周年記念式典及び記念音楽会を岡山シンフォニーホールで開催

25日 第57回岡大サイエンスカフェを創立五十周年記念館で開催

10 November

26日 国際原子力機関(IAEA)と最新のがん治療法であるホウ素中性子捕捉療法(BNCT)に関する協定を締結



28日 「第三回・岡山杯」日本語スピーチコンテストを中国・大連海事大学で開催

31日 国際学術都市「学都岡山」創生のために幅広く活用する学都基金の取り組みを支援する「学都基金発起人会」を発足



4~6日 津島祭、鹿田祭を開催

7日 中南米地域の教育関係者が本学で「中等教育課程における数学教育の質の向上」を目指す研修を開始

8日 ウガンダ・マケレレ大学と大学間協定を締結

11日 「岡山大学知恵の見本市2016」未来を見つめて」を創立五十周年記念館で開催

15日 全学同窓会(Aumni)東京支部が「第20回卒業生フオーアップセミナー」@東京を開催

19~20日 農学部収穫祭を開催

21日 国立大学法人岡山大学学長選考会議が、次期国立大学法人岡山大学長適任者に横野博史氏を決定



30日 日経BCIコンサルティングの「大学ブランド力ランキング調査2016」(中国・四国編)で岡山大学が第一位を獲得

研究・臨床成果

■異分野融合先端研究コアの守屋央准准教授と大学院自然科学研究科の金高令子大学院生らのグループは、細胞内での輸送プロセスには許容量(キャパシティ)があり、そのプロセスを通じて輸送されるタンパク質が過剰になると細胞増殖を阻害することを初めて体系的に示した。英国の科学雑誌「Scientific Reports」に掲載。(9月・定例発表)

■大学院医歯薬学総合研究科の江口徳徳助教授らの研究グループは、微細加工3次元細胞培養プレート(商品名:ナノカルチャープレート)を利用した新しい三次元ドラッグ・スクリーニングシステムをつくり、そのシステムを利用してがん細胞の形質転換の一種である上皮間葉転換(EMT)を抑える薬を見つけた。米国のオンライン科学雑誌「PLOS ONE」に掲載。(9月・定例発表)

■大学院自然科学研究科の妹尾昌治教授らの研究グループは、がん幹細胞が血管の細胞へ分化して腫瘍内で血管系を形成することを証明した。がん幹細胞が宿主由来の血管内皮細胞を巻き込みながら、自らも血管内皮細胞や疑似血管を構成していくことは、従来の腫瘍血管が形成される概念を進化させる世界的にも新しい発見。がん研究の国際科学雑誌「American Journal of Cancer Research」に掲載。(9月・臨時発表)

■惑星物質研究所の辻野典秀SSS特別研究員(PI)、山崎大輔准教授と愛媛大学、神戸大学、公益財団法人高輝度光科学研究センター(CASRI)、東京工業大学の共同研究グループは、地球内部で最も多く存在するブリッジマナイト多結晶体のせん断変形による結晶選択配向を実験により解明。スラブ(沈み込んだプレート)近傍の地球下部マントルの流れ場を明らかにした。英国の科学雑誌「Nature」のLetterに掲載。(10月・臨時発表)

■大学院環境生命科学研究科の宮竹貴久教授らの共同研究グループは、肝臓殺菌の大害虫であるタバコシバンムシが、紫外領域(375nm)のLEDの直射光に最もよく反応することを実証。LEDと既存の性フェロモンの効果を組み合わせることで、メスオスともに捕獲できることを実際の食品工場で実証し、害虫の行動特性を利用した新型の害虫誘殺トラップの開発に成功した。アメリカ昆虫学会の公式ジャーナル「Journal of Economic Entomology」(Oxford University Press) 電子版に掲載。(10月・臨時発表)

■大学院自然科学研究科の世良貴史教授、森友明助教授らの研究グループは、標的ウイルスの遺伝情報である「ゲノムRNA」を短時間で切ることでできる「人工のハサミ」、『人工RNA切断酵素』の開発に世界で初めて成功。バイオテクノロジーの総合科学雑誌「Biochemical and Biophysical Research Communications」 電子版に掲載。(10月・定例発表)

■岡山大学病院予防歯科の入江浩一郎講師ら研究グループは、歯科検診の受診者3390人を対象に5年間の追跡研究を行い、男性における歯周病の発症リスクが職種で異なることを明らかにした。疫学専門雑誌「Journal of Epidemiology」 電子版に掲載。(10月・定例発表)

■大学院自然科学研究科の見浪護教授と松野隆幸講師らの研究グループは、自律型水中ロボットAUV(Autonomous Underwater Vehicle)の水中統合実験に成功した。AUVの自動航行はロボットのエネルギー源であるバッテリーの海底での自動充電につながり、深海底での自律型知能ロボットの長時間の自律連続運転や作業を行うことが可能になる。本技術は、長期間連続航行を要する海底資源探査・回収や海中未確認生物の生態調査等への利用が期待される。(11月・定例発表)

岡山大学病院 総合患者支援センターを ご存じですか？

総合患者支援センターは、「私たちは患者様に最良の医療とケアを提供するために活動します」を合言葉に、患者支援、地域医療連携を担っています。多様な支援体制でサポートを続けています。

***** 総合患者支援センターの主な業務 *****

患者支援部門

- 患者相談
- ボランティア活動支援
- がん相談支援センター
- 広報
- 認知症疾患医療センター相談窓口
- チーム医療活動支援
- 退院支援
- 患者相談窓口

● 医療・看護・福祉相談

- 医療費や生活費が心配、福祉制度が知りたい、病気に関する不安、自宅での療養の仕方や介護の方法を知りたいといった医療・看護・福祉相談をソーシャルワーカー・看護師がお受けしています。
- がん診療連携拠点病院の「がん相談支援センター」の窓口です。がんの発症や経過に伴う心理的な相談がしたい、がんの治療を受ける費用が心配、利用できる福祉制度について知りたい、病気を抱えて就労することが心配などのご相談を病院内の腫瘍センターと連携してお受けしています。
- 治験・臨床研究相談窓口、てんかんセンター相談窓口、認知症疾患医療センター相談窓口も担っています。

● 在宅療養支援（転院調整・在宅支援）

- 入院、外来問わず、病気を抱えて生活するために手助けとなるサービスや、窓口あるいは療養を支える制度の利用など、必要とされる方のご相談にのって、地域の方と一緒に支援を行っています。当院での治療後や退院後にリハビリの必要な方、もうしばらく入院継続の必要な方には、関連部門と協働し転院先の調整をしています。

● ボランティア活動の支援

- 病院でボランティアをしていただける方の募集や、ボランティアの方に定期的に研修を行っています。

地域医療連携部門

- 診療予約
- カルテ開示
- 病診・病病連携
- IT活用による遠隔医療連携

● 診療予約

- 診療所や病院など地域の医療機関から岡山大学病院にご紹介をいただく際に、あらかじめ診療科と医師および受診希望日をお聞きし、調整をして診療予約（FAX）の取得や予約変更を行っています。また、セカンドオピニオンの窓口も担っています。

● 病診・病病連携

- 地域医療連携に関する情報収集や連携医療機関認定証の発行を行っています。また、晴れやかネットによるカルテの情報共有を促進し、院内窓口として手続きを行っています。



● お問い合わせはこちら 総合患者支援センター

〒700-8558
岡山市北区鹿田町2-5-1
岡山大学病院外来棟1階



【患者支援部門】

TEL 086-235-7744
E-mail sienc@hp.okayama-u.ac.jp
(相談受付時間：平日8時半～17時)

【地域医療連携部門】

TEL 086-235-7205